

神中州記

中村俊定文庫

文庫 18

1018

2





神中物才五

目錄

まじり
 神の御
 神の御
 神の御
 神の御

あまの
 神の御
 神の御
 神の御
 神の御



本
二
五

袖中五二

袖中抄五

とやひ

伊勢物語云む一袖中いづれりあはれあはれ
糸うする若しとて志願す一あはれりよしとてあはれ
その所とていふ海あはれいづれりあはれあはれ
うのちとていふあはれとてあはれあはれあはれあはれ
いととていふあはれとてあはれあはれあはれあはれ
男乃きとていふあはれとてあはれあはれあはれあはれ
あはれとていふあはれとてあはれあはれあはれあはれ
うらみあはれとていふあはれとてあはれあはれあはれ



千のりく日くむしんたひりあ
 志のふんこく積くさりあしれあ
 とくじをくしあさひのくさるあ
 さりあさひかん
 心ちたく志志のふりから治るく
 心ちたああしあさりあ
 とくさく志あさりあ
 びく人さくくちりあさひあさるん
 題詠云考日申紀よ風波とあさくさ
 よありさくくあさりあさりあ

袖中五二

斐然之藻とあさくあさりあ
 里国のあさりあさりあ
 ありたさりあさりあ
 お文書大切さりあ
 又源氏詞云たさりあ
 さいあさりあさりあ
 たさいあさりあさりあ
 さいあさりあさりあ
 さいあさりあさりあ

めだる海くう人あくるあくるあくる海あー海くう
又まじりくうあー海くうあーあーあーの海くう
あーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあー
あー

私云いふいふいふいふ

源氏云いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

うにわういふいふいふ

賀茂女集云いふいふいふいふいふいふいふいふ
又日由紀よ且閑とらあーあーあーあーあーあーあー
又或伊勢物語云いふいふいふいふいふいふいふいふ

柳中三三

私云あつしうの物語あつしうあつしうあつしうあつしう
あつしうあつしうあつしうあつしうあつしうあつしう
乃いあつしうあつしうあつしうあつしうあつしうあつしう
あつしうあつしうあつしうあつしうあつしうあつしう
あつしうあつしうあつしうあつしうあつしうあつしう

奥義故云同いふいふいふいふいふいふいふいふ

あつしうあつしうあつしうあつしうあつしうあつしう

あつしうあつしうあつしうあつしうあつしうあつしう

あつしうあつしうあつしうあつしうあつしうあつしう

あつしうあつしうあつしうあつしうあつしうあつしう

めげけなむとわたりてはあり
 同士の心むかひにありまじき事なむかひ
 人むあつらふ
 昔万葉云むめのとれ後よりくくむかひ
 あり花やいぬれもむかひはくくむかひ
 又肺親のまゝむかひくくくくむかひ
 是後くくくくくくくくくくくく
 此のまゝむかひくくくくくくくく
 然らむまじき事なむかひくくくく
 かくくくくくくくくくくくくく

袖中五四

海しとあやほきくくくくくく
 文集も困りまじき事なむかひ
 閑齋もくくくくくくくくくく
 源氏物語もくくくくくくくく
 私云閑齋をり日中絶ありまじき事なむかひ
 あつらふくくくくくくくく

あつらふくくくくくくくく
 ゆくくくくくくくくくくくく

顕昭考方兼又巻を抄序ツク撰テ葉ニ此集ヲ古語
 雖モ實ニ比興ヲ幽ニ山ニ殿ニ字ニ感ニ人ノ句ニ愛ニ躰ニ今

たつては〜
きんぎょのたつては〜
〜

奥義物とわい〜
は奇りつるたを或物とわい〜
〜
又女乃らよるり〜
〜
〜
〜
〜

二五

とけりわ〜

本〜
〜
〜
〜

女乃らよるり〜
〜

但當丹奇と海〜
〜
〜

さなむし世にすゝるにすゝるに皆みことけりて
と無き世にすゝるにすゝるに
又も業舞にすゝるにすゝるに
やゝあふしにすゝるにすゝるに
私にすゝるにすゝるにすゝるに

あはれなすゝるに

半束たふゆいうてふさうりきりてあはれにすゝるに

久奈久良之野

きこひあはれなすゝるにすゝるに

額貼ふあはれにすゝるにすゝるに
うれはるにすゝるにすゝるにすゝるに

袖中五九

あはれ雄ゆう山やまにすゝるにすゝるに
さづかひにすゝるにすゝるに
えられたるにすゝるにすゝるに
あはれにすゝるにすゝるに
も其義致す業わざの半束たふゆいうてふさうり
一万業舞いちばんえぶまひにすゝるにすゝるに
やゝあふしにすゝるにすゝるに
私にすゝるにすゝるにすゝるに
とれにすゝるに雄ゆうの山やまにすゝるに
あはれなすゝるにすゝるに

又吉野のついでにわたりしきりてきたるわりのついでに

物言ひの流るる河又万葉歌云

千手^{チノテ}の流るる河又^{カハ}万葉歌云

南^{ミナミ}河^{カハ}細川山を檀弓^{タンクウ}東^{ヒガシ}級^{クワ}まで

とよ松の流るる河

これにわたりてはわたりしきりてきたる

とよ松の流るる河

顕昭の流るる河又^{カハ}万葉歌云

物言ひの流るる河又^{カハ}万葉歌云

とよ松の流るる河

おきりてはわたりしきりてきたる

物言ひの流るる河

とよ松の流るる河

おきりてはわたりしきりてきたる

物言ひの流るる河

とよ松の流るる河

おきりてはわたりしきりてきたる

物言ひの流るる河

とよ松の流るる河

おきりてはわたりしきりてきたる

むりあやをわの者とていふ
 昔のあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 詞のあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 とあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 まひつあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 をあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 とあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 といふあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 又頃和名よ後字を訓とるは吳語よ謂
 小後やまはしおはまはしは後撰の中神

神中三十一

むりあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 といふあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 又頃和名よ後字を訓とるは吳語よ謂
 小後やまはしおはまはしは後撰の中神
 昔のあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 とあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 まひつあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 をあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 とあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 といふあやをり乃名成あやおはもはまはしは後撰
 又頃和名よ後字を訓とるは吳語よ謂
 小後やまはしおはまはしは後撰の中神

いふはくはたは吳服とてわりぬぬ一可狂
人意欲

縁起物と或人云はば物のあつたり或人云
じう一吳服とてわりぬぬ一可狂
乃若やの袖よ一せくもじう一可狂
あつじう一可狂

或人云とてあつじう一可狂
婦とじう一可狂
あつじう一可狂
一可狂

袖中五十二

いふはくはたは吳服とてわりぬぬ一可狂
乃若やの袖よ一せくもじう一可狂
あつじう一可狂
一可狂

或書 和語抄

一可狂

あつじう一可狂
えれわりあつじう一可狂

今名取とてあつじう一可狂

わが乃ち汝にむむとてぬむむとてぬむむと
奥義物云く終とてり口後乃名く先自時
吳必より二端送後とて或物よりたるを
或後より二人忠後織乃名く一人忠名に
とわ一人忠名にわとてわ一人の大神
ぬむむとてり一人を獲回乃名くたるまき
より一自事記よありとてり但ひ多の程
人忠名をてせとてり多居たれとてり
ぬむむとてり終とて海とてぬとてあり
とありとてり汝わ乃名ぬとてりわ

過考吳字はく終とてぬむむとてぬむむと
りとてりはく終とてりあり眼とてりとてり
人忠名とてりありとてり終とてり多とてりわハ吳服
とてり事よとてり吳國の衣とてりわや通後
ぬむむとてりよありとてり終とてり是の送物とてり
の吳字

高皇皇御孫云無非天宮皇世七年春二月戊
午朔遣阿知使皇都加使皇於吳令孫
孫工女^{ヌイヒメヲ}阿知使皇末後^テ孫國^ニ款^ス送^ニ
平吳則至^ル孫更不知道路^ヲ下^ニ知^ル道者

うきくえりまのありはさくばるり

又考日本紀曰蘇我之天皇四十年二月阿知使
主木自吳至筑紫時胸軟大祓有^リ工女^ヲ
故以^レ兄媛奉^ル於^レ胸軟大祓是則^レ今在^ニ筑紫^ニ
國^ニ津使君之祖^{ナリ}也既^ニ而寧^キ其^ノ婦女^ヲ以^テ至^ル津^ニ
國^ニ及^テ武庫^ニ而天皇崩之不及^テ即獻^テ于^レ大鷦^ノ
鷲^尊是女人^{ナド}也之後今吳衣縫蚊屋衣縫是
あまのくははまのきくくんあまのくは
あまのくはのきくくはまのきくくは
くはまのきくくはまのきくくは

くはまのきくくは

常世^ト遇^ハま^ルあ^ら海^ノ物^ヲを^シは^ルま^ルこ^と
ま^るあ^ら海^ノ物^ヲを^シは^ルま^ルこ^と

顯^レ昭^ス云^フこ^のよ^のら^ふこ^の日^本紀^云昔^ハ世^ノ第^一山^ニ
と^り記^スこ^のよ^のら^ふこ^の日^本紀^云昔^ハ世^ノ第^一山^ニ
上^ニ云^フこ^のよ^のら^ふこ^の日^本紀^云昔^ハ世^ノ第^一山^ニ
を^シは^ルま^ルこ^の日^本紀^云昔^ハ世^ノ第^一山^ニ
を^シは^ルま^ルこ^の日^本紀^云昔^ハ世^ノ第^一山^ニ
を^シは^ルま^ルこ^の日^本紀^云昔^ハ世^ノ第^一山^ニ
を^シは^ルま^ルこ^の日^本紀^云昔^ハ世^ノ第^一山^ニ

西遊志 赤海傍の寺やいふふはなして居る常トコロ
 世圖ドより来るらるるわとの魚の髓ズイ等あり
 此録の胡公のりきとらとつり又蓬萊
 ともきと海ともふは又わつりわわわつりあ
 朝必の北るわとまのあへるわと秋らるる
 又蓬萊の東海や又らの伝説へは及まむ
 おととつりつとわわわ
 又わつりあふ常の所らるるひよきとら人を
 うつりひよくに通漸らあめ
 るまにらる人よととて伝をせられたし

又清正壽トコロ云とことよつりわらぬ衣さむさ
 うよあゆむととまわさぬの風
 又清正壽の常世より来るとの説をうけたり
 又芳日中紀のらと伝云常世トコロ
 問曰是何處乎答曰或書此圖或曰蓬萊
 則是仙人之所在吾耳取在末詳
 又芳日中集卷之三卷云大律淵上道之時過
 鞠浦日作
 又云もあつりつととれつりのむるまも

常世よ阿婆とていふことなるべし
 今案じ奇の遠祖よ一せし縁とて記しらふ
 心もとぬい縁を他へのありとあり奇等と
 縁といふものもぬれと遠祖よりありと事
 といふ所とて一清心なるものありと
 可考と又事也
 又日本紀のほよとて縁の事も或いひある書
 と或遠祖とていふ所在来詳といふぬれい
 ぬれといふ胡よとて義とていひはぬ
 といふこと

おとれさひ人あると見えたりと縁と
 多かりとていふぬれとていふ
 顕昭とていふぬれとていふ
 ぬれとていふぬれとていふぬれとていふ
 とていふぬれとていふぬれとていふ
 考日中紀云清浄原天皇幸吉野河上殿を
 いき給ふとき神女天降舞舞云たれぬぬ
 おとぬぬとていふぬれとていふぬれと
 ぬれとていふぬれとていふぬれとていふ
 欽抄は方を和方論義号同奥義抄より下句を

おしめさるる御心さまのうたてに
日本宗親中回のよたりに
其の色なき様を
又る葉長哥とほふるおほい
はるきこらららるる
まわりらるる御心さま
又芳信卿物持之仁和寺の
おめをあららるる
おまふもこの思ふ様
まらるるおまらるる

おまらるる御心さま
おまらるる御心さま
おまらるる御心さま
おまらるる御心さま
おまらるる御心さま
おまらるる御心さま
おまらるる御心さま

おまらるる御心さま
おまらるる御心さま

吾君彼云たむかひの^{ラキナ}花はなほ
奥義抄云おんむかひの^{ラキナ}花はなほ
うらむ^カ花はなほ
童蒙抄云おんむかひの^カ花はなほ
と^カ花はなほ
こころはなほ
し^カ花はなほ
く^カ花はなほ

おんむかひの^カ花はなほ
又おんむかひの^カ花はなほ
おんむかひの^カ花はなほ
ひまわりの^カ花はなほ
か^カ花はなほ
又法性寺殿^カ花はなほ
け^カ花はなほ
ま^カ花はなほ
其後判^カ花はなほ
ん^カ花はなほ

中流よりふきあがりて、
指し下す討ひ義也

せりり乃れ入 ころのなま

顯船云乞ひ及推河云仁和帝ニカトより此時乃れまゝ
とて并河ナリ忠約をまじりて、
めりあや

よりわかれ野入とて能固舟、
松云鳥羽南よみとせりり、

大鏡云、
はむさうとて、
はむさうとて、

あつとて、
次も深きれは、
ゆとて、
ハ帝コラハ殿上又あ、
かろと、
い海られ、
むと、
ろる紙、
なれと

乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...
乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...
乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...
乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...
乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...

乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...
乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...
乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...
乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...
乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣... 乃其臣...

此阿乃并海... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...
乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終... 乃終...

かゝることをいふは、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

きんぎょ

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、

物志をわたりて世のありをわたりてお飲
童蒙抄をわたりて世のありをわたりて
ゆりまげをわたりて世のありをわたり
あしぬかりをわたりて世のありをわたり

私考万葉集云

夜之植^{ヨノホ}挿^{ホト}品^ヒよりてて種を日取ぬる

あしぬかりをわたりて世のありをわたり

又云おまのころから夜より種を日取ぬる

種をわたりて世のありをわたり

今云お種をわたりて世のありをわたり

くまのうゑのうゑ

童蒙抄云これより種を日取ぬる

種を日取ぬる

とて種

はののうゑの薄を礼ゆりあつて種を日取ぬる

こいびとをわたりて世のありをわたり

顕始云ゆきをわたりて世のありをわたり

またゆきをわたりて世のありをわたり

の河事や種をわたりて世のありをわたり

又万葉集云

より厚くのもとのたふさつめをにらり
とて被るるまのたふさつめをうきふ
又天徳寺の谷二番右邊感奇云
とらやとらふいあつて形くたふり
おしとらふいあつて形くたふり
判詞云右界うらあまむらちんもあつたふり真
なく洞きふらうらあまむらちんもあつたふり真
私とらうらうらあまむらちんもあつたふり真
と洞乃事云
又おらふらうらあまむらちんもあつたふり真

袖中五世二

又おらふらうらあまむらちんもあつたふり真
と洞乃事云

袖中物語六

目録

うらみの流るる

くさしもの

見よりのつき

あはれ乃まてり

くあちれしもの

せり流るるむしれ人

井きり乃まてり

袖中抄第六

るまの流るひ

右今云業事^{ナリヒラ}朝臣^{サキノミ}伊勢^{イセ}およるまの流るひは海
らるる^{サキノミ}河^{カハ}舟^{フネ}らるる^{サキノミ}舟^{フネ}人^{ヒト}よらるる^{サキノミ}舟^{フネ}
あひら^{サキノミ}舟^{フネ}あひら^{サキノミ}舟^{フネ}人^{ヒト}よらるる^{サキノミ}舟^{フネ}
てあひら^{サキノミ}舟^{フネ}あひら^{サキノミ}舟^{フネ}人^{ヒト}よらるる^{サキノミ}舟^{フネ}
久保

あひら^{サキノミ}舟^{フネ}あひら^{サキノミ}舟^{フネ}人^{ヒト}よらるる^{サキノミ}舟^{フネ}
あひら^{サキノミ}舟^{フネ}あひら^{サキノミ}舟^{フネ}人^{ヒト}よらるる^{サキノミ}舟^{フネ}

わ

業事抄長

わがしんじゆをばらばらと
あはれうらなひをばらばらと

顯昭えくるまのほろけのほろけのほろけ

仔細物終えむじつ一書ありきつらぬあはれいさむの

あよりまのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

かりまらうんあはれ 二葉可雅高のほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

ほろけのほろけのほろけのほろけのほろけのほろけ

乃言此鳥乃公よりひりきりき

法捕羽鳥之物、はくひて鷹將忠使之物
乃使とむむ

國史云光孝天皇^{ゴキョウ}八年十二月二日

勅使方忠の作位五位上及弟等位六

人近來一人鶴七聯大九を於播磨必

中務少輔在原弘景六位四人と來一人會

五六六を於美作必並將取野會

仁和元年三月七日を於河内下^{カニノ}於

利基於遠江必右と、鳥羽源湛於備後

必並臂鷹^ト於大行掃野會路次供過并
波投之間用^ラ正統供書

同二年二月十六日を於新加權外及恒泉

雅樂以位五位下在原棟梁於備中國並

志實^チ實^チ鶴拂取野^ト

今案此事欽但業平為伴使事不見不

慮^ニ若業平誤^テ利基^ト於馬^ト以有^リ疑伴使

此時時以性心及不見之

今云業平名元孝四年六月廿八日卒^ス何^ヲ為

仁和元年之將使外又假令業平後不致^ニ將

使下為東國之次奉為俘虜其車將使下書
後車侍従

又兼平將使之條准不義國史實物使在物籠之
數を云る皇の流りひとつひつひと流りひよ
わら福ころもとあ乃使とて昔を月毎よあ上
人ひをりを流使とてこのあへまつつせ給事
る人をもとあはれとあはつ給まらきむを
乃使のひとつひつひ

今云俘虜物籠乃云この河海に將使ときああ
つ使はる使とて車平とい給まら家の流使か

もま人と流るまる今まよあはれ右流を
まこの初使も流前とあの人これ人さあ海さ
まへめりる皇の流はあとあをね給まら
さわりあつとあよ府乃とあを流しつり
いれねと今ま又流官を流い人さまら
とまらとあとあていせ又は將使とてあ
つとまらとあはれあ皮麻角等流も
ひ糸又不守有る
或らる皇のあはれとあをのをり付使
いれねとあ

或は流石と正税更替の事申すは更替は
彼れ凡はぬ之条不為業早之役故凡此
ありむもさるて凡は住持相違の詞は
ありあらざるに余義あるらんは又
知れどもせざる所於他故もみ
禪心義只付古今之又不可不
流石

くあられしん〜
じも秘本ありむ〜
くあられしん〜

顯昭云くあられしん〜
し〜
多秘本ありむ〜
久〜
松下信乃久米流乃揚ありひををおせり
とあるすも別乃揚

久〜
後揚

久〜
久〜

くあられしうへんもあやう

又神楽譜カクラ云うつらうはひはくあられしうへんの

心もあはれしうへんもあやう

又只のうへんもあやう

岩鶴イハまゝはらうちも終ぬる

あらまゝのうへんもあやう

野田考云江志優婆塞ウヱハ俗姓ソクセイのかげ江乃

今の高野山タカノヤマ朝長と云民之名をい小角コカクと云

大和タニシマ葛城カツラギ乃上郡矢八ヤヤチ名村乃人なり

うへんもあはれしうへんもあやう

初一ニ宿天をよめるのうへんもあやう

一と云又仙をサマあはれしうへんもあやう

所余年山ヤマ宿天乃中ナカあはれしうへんもあやう

系をケイあはれしうへんもあやう

ひくヒク孔明ケイメイの呪ノリをノリあはれしうへんもあやう

三サン験ケンをケンあはれしうへんもあやう

新シンく仙人セネン志シ城シヤウのうへんもあやう

足タラシ襪ハキをハキあはれしうへんもあやう

あやうアヤウと云ト云はれしうへんもあやう

是コノ世ヨをヨあはれしうへんもあやう

吾輩も此の間は橋を渡さむといふに日暮國
乃神くよら乃のまあはうらまのしんま
と云神一衆乃間なる橋をまこしはらめく
ひつとまらさぬを返ひつとりはる命はよ
をせむらよ神をまらなをあらく魂言ま
帝に養へ海をく返のうらそくまらま
ま物をこふんとは飛く人くと帝
このつきふららぬえ乃め志を信まあり
あうしはらりし神を返もつ神も世にあん
あう返あそわく教をまらるるにうと

かき神く養あうわく人をまきくあらうま
うしはらあお使しわく神をぬまらこ
海えんとひらお母り教又ありん神を
神をわらわくあやまらぬめをまらせ
ら返くあこあさあすしわりわらうら
はゆ返養小法門おる神返くめしうられ
ぬま返のまめいさうら返かしく護法を
まららるし神をまららるる唐今らわらり
は金堂山表縁起よらあうらけいんをうあ
るらわ

帝王家抄云 三母畧光云 秦始皇皇海内
 石乃橋を修く家海神ありたため小櫃を修
 始皇^{シノク}あひんあをを来^キむ海神乃いんく家
 取んふく一家取をうんとあやう神帝別
 海は今事亦九里ありく海神をいふた名の
 人ありく傳^ツ年^ツてうぶらとばるり書^キは
 ありく取^リ人ひそくは是をとりくそ乃
 取をうく神いりく帝物をそむりりわ
 くあり神と始皇馬をそわめくく魚^イり
希脚程主及時僅得登岸
 る丸志りわをむくよあうひくくは

くらよりよきうよのかりあは然えくり書
 ことりとのあよおむ終くうんあふ
 けりて神をとりく石橋のりくあはと
 えぬるりとおひあはひくく神く
 のとらるり

松芳云秦始皇を城西南牛耳山に造石橋欲
 後海觀日お入亦石橋造と程存舊南説始
 皇の形石石自り而至今西岸石坊東首原
 賑以鞭撻瘖之ハ駢をこい事鬼疑有斯跡也
 かるり

わのしあことし中書志くをさるるくハ
へしとれとらおもしはらりなり
顯服云いの中務親とあやうりてよみくつら
伊勢りく

うむしとことあつらなをそくはま
つ福しりあふまもさつはなうし
うむしとものたと神あさひ乃あれ中じり
まはしとひふあうあうしとれあといけ
うりかあしとあうい
ま御まといはるしうくういあ

ぬやせりあういさ梅かるとふり
海つ福あういさあやうあびせ
かうとくういさあれやあ
名うさうやくめあうういさ
りりあいさういさあて
今葉小ひ奇若ハ催馬樂をなり
神楽譜云朝野吹也催馬楽拍子
或本云あさうやうのまはるのよらあ
あはりなういさあ

は歌為清和のやう是延喜廿一年勅定し

あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ

い義叶思きい仍先注載之也

綺語抄云考あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ

敷原乃南面あつらひしきみふたぐ海つるをれをいふ
うきんは着を風乃吹あつらひしきみふたぐ海つるをいふ
いほむむあき弁をさつらひしきみふたぐ海つるをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをいふ
あつらひしきみふたぐ海つるをいふ

又武書義同い抄

あつらひしきみふたぐ海つるをいふ

うらふこのそりほつゝあつてもや朝きつあふん
 とほつれくおつゝいふおまよはにうらよ
 風おつれおつゝいふおまよはにうらよ
 ねつゝおつゝいふおまよはにうらよ
 人おつれおつゝいふおまよはにうらよ
 ありはつゝいふおつゝいふおまよはにうらよ
 夕つれおつゝいふおつゝいふおまよはにうらよ
 みとの風おつれおつゝいふおまよはにうらよ
 つれおつれおつゝいふおつゝいふおまよはにうらよ
 もあつれおつゝいふおつゝいふおまよはにうらよ

うらふこのそりほつゝあつてもや朝きつあふん
 とほつれくおつゝいふおまよはにうらよ
 風おつれおつゝいふおまよはにうらよ
 ねつゝおつゝいふおまよはにうらよ
 人おつれおつゝいふおまよはにうらよ
 ありはつゝいふおつゝいふおまよはにうらよ
 夕つれおつゝいふおつゝいふおまよはにうらよ
 みとの風おつれおつゝいふおまよはにうらよ
 つれおつれおつゝいふおつゝいふおまよはにうらよ
 もあつれおつゝいふおつゝいふおまよはにうらよ

てまゝとて并ばさくくひくまばこのよのみま
ありしやうにありゆましこのゆく其女信
を常以めしあわと結せしを結せしを信
縁の名こそやしき歎く

奥義抄云同云せりほくきつれんを信
をわあし信乃并めり信を信とくりの
まのつらうまくまはりてあよたわく
めらう物たりとく并を信とく信信と
よまらしあまのあゆたりとくり或は
并とらふまのらうらわとくりま

はく海とて

昔はしつれんあまの信とく信とく
いある大物あまは信とく信とく信とく
と信とく信とく信とく信とく信とく
たり門とりの信とく信とく信とく信とく
くたまらうとく信とく信とく信とく信とく
つらうとく并を信とく信とく信とく信とく
ひあまの信とく信とく信とく信とく信とく
昔はしつれんあまの信とく信とく信とく
と信とく信とく信とく信とく信とく

基の又殊をりまふらこのれに智光をり智
 光を光とくはましくは物にまをりとい
 うはまをりあをくは人若くは殊に
 久保導^{スラビ}師^シあく仁海僧^ニののれをり
 ちく^チ并^ヒに^ニ形^シり^シの^ノ人^ノ心^ノを^レ導^ク
 ちく^チ心^ノを^レ導^クありと形^シの^ノれ^ヲ
 和^ニ歌^ニ并^ヒに^ニ儀^シ中^ノよりまをりとい
 奇^ニ歌^ニ并^ヒに^ニ先^ニ儀^シ歌^ニ
 又^レ後^ニ歌^ニまをりといの^ノれ^ヲ導^ク
 みる^ニま^ニか^ニり^シは^シの^ノれ^ヲ導^ク

一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ四十一ノ四十二ノ四十三ノ四十四ノ四十五ノ四十六ノ四十七ノ四十八ノ四十九ノ五十ノ五十一ノ五十二ノ五十三ノ五十四ノ五十五ノ五十六ノ五十七ノ五十八ノ五十九ノ六十ノ六十一ノ六十二ノ六十三ノ六十四ノ六十五ノ六十六ノ六十七ノ六十八ノ六十九ノ七十ノ七十一ノ七十二ノ七十三ノ七十四ノ七十五ノ七十六ノ七十七ノ七十八ノ七十九ノ八十ノ八十一ノ八十二ノ八十三ノ八十四ノ八十五ノ八十六ノ八十七ノ八十八ノ八十九ノ九十ノ九十一ノ九十二ノ九十三ノ九十四ノ九十五ノ九十六ノ九十七ノ九十八ノ九十九ノ百

と^レあ^ニめ^ニの^ノよ^ニめ^ニあ^ニる^ニ
 歌^ノ并^ヒに^ニ形^シ中^ノよりまをりとい
 ち^クあ^ニめ^ニの^ノよ^ニめ^ニあ^ニる^ニ
 あ^ニめ^ニの^ノよ^ニめ^ニあ^ニる^ニ
 く^ニも^ニあ^ニる^ニは^シの^ノれ^ヲ導^ク
 も^レ物^ノ形^シ歌^ニ
 又^レ小^ノ野^ノ僧^ノ心^ノを^レ導^ク系^ノ不^ノ重^ノ心^ノ中^ノの^ノ基^ノ并^ヒ
 若^クは^シ智^ノ光^ノ事^ノを^レ不^ノ重^ノ心^ノ中^ノの^ノ基^ノ并^ヒ
 十^ニ余^ノ歳^ノあ^ニく^ニ没^スあ^ニく^ニ没^スあ^ニく^ニ没^スあ^ニく^ニ没^ス
 師^ノ若^クは^シ智^ノ光^ノ事^ノを^レ不^ノ重^ノ心^ノ中^ノの^ノ基^ノ并^ヒ

猶憶名僧聖教天子皇清時時以基補大德也智
 光之象也知之不信以基後為汝孫之象
 竹園并家費彼内眼曾期退隱山中智
 光忽死後遺言不葬十日得獲告其子
 等曰爾等宜使駭逐家矣路有金殿家同
 使名答曰以基并下生之處汝好以遺息
 燈火灑室息同伴名答曰汝欲入獄之便
 則之爾等所曰汝於間浮乾日中國有癩惡以
 基并之今所出在汝志懲其罪歸一人
 象抱羽粒肉筋骨融竟教汝之智光也

袖中六五二

竊欲謝拜干時行基和尚在揚州國造
 那波江橋智光釣到其魚獲遙見知意合
 嘆智光法地礼為淚謝罪之
 今付之案之以基及此智光者以事欽
 未了大凡及後導師不知何時
 之後成之德也其基生菩薩洞之
 未了大凡及後導師不知何時
 象之象也其生之
 心小之象也

月一の事乃の家もさし

願取之為冥河之流二月之この月也一月は
つとむいと秋又秋七秋山里のちもはなるおこふ
ひ道苑^ト管^ナり名香を燭之人も停夕の是来な
のあつりきこの可也おこふひはあつり
又灌^ク順^ノの垣也よあつりき掌^ウ中^ノ小^ノ花^ノ授^キ
ひもつり事かあつりおれを秘^ヒ密^ノのあつ
きつあつりハ流^ハあつりあつりあつり
今案よと終^トもつりつりあつりあつり
又深^シ河^ノの屋^ノきつりあつりあつりあつり

袖中六三

きあつりあつりつりあつりあつりあつり
力及^リあつりあつりあつりあつりあつり
とらよ和^シもむ貴^クとつりあつり

編^ヒ終^ス去^リ大^ニ以^テ守^ル御^示馬^ヲ以^テ成^ル勞^ヲ能^ク成^ル人^ト也
又或^レ人^ニ云^フん^ニおつりあつりあつりあつりあつり
つりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
とら^ハ卒^ニ總^ニ第^ニとつりあつりあつりあつりあつり
つりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

今案^ニよ^シあつりあつりあつりあつりあつりあつり
とら^ハあつりあつりあつりあつりあつりあつり

てうまうこころやとわたりふあとかく終て
こころを心付矢と云終と終と比あもいたつこ
にそんこころこころあつた終あつた終こころ
こころあつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終

あかめりーん

馬醫書小み書とあり仍ありうらふんあつた
もあつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終
あつた終あつた終あつた終あつた終あつた終

奥義抄云んふいこころあつた
又選又賦云ん不耐煩而官事鞅掌或
清虛以婉約每塗頰而去監

弘仁格序云浦投難忘功程多少等類
 既經禪師等商量持吃折中不煩上國煩惱
 受學又云煩惱秋身惱秋山
 文集云縹緲念女土之帶
 貴國是等事をもつる事あり
 法苑珠文云生三般若耶
 是仏を昔やと奉向
 大和物語よいくぬれ女君詞三人のあはれ
 をもつる事をもつる事あり
 又云あまのこが事ありわらわらありとあり

袖中六九四

ころころりりり
 あまのこが事ありわらわらありとあり
 然る惱昔也

井もりの志

ぬるるの志ありとありわらわらありとあり
 おもりの志ありとありわらわらありとあり
 顯昭云法苑珠文贊云守宮以血漢女人體
 必有私情流之不落可守守宮也
 嘉祥法む義疏云守宮者蟬路磔之古人
 取此虫置置肉以朱飲之令赤若多

おせぬとも家ぬりう人集とて海ありの
 おもりも海をりうきりうこそあま
 ぬくも心書をきりうあまのうき船をきりう
 よめつにぬりうそりあまをきりうよま死
 んぬりう心書をきりうあまのうき船をきりう
 うあまをきりうあまのうき船をきりう
 童童をきりうあまのうき船をきりうあまのうき船をきりう
 てらうせうあまのうき船をきりうあまのうき船をきりう
 うあまのうき船をきりうあまのうき船をきりうあまのうき船をきりう

果といふおもりあまのうき船をきりうあまのうき船をきりう
 云々

私云上より書りて物志乃又より同之仍不事之
 弁論義 物志物志の物志屋うあまのうき船をきりう
 たり物志の物志

奥義物志の物志仍書之

私云并より書をきりうあまのうき船をきりうあまのうき船をきりう
 皇のあまのうき船をきりうあまのうき船をきりうあまのうき船をきりう
 をきりうあまのうき船をきりうあまのうき船をきりうあまのうき船をきりう
 あまのうき船をきりうあまのうき船をきりうあまのうき船をきりう

くうごといふ義もとまて海くといふもいふ縁もそ
被ちおろし一事なり和泉式乎云々よこのう
このの海もあまふこのたうこふをり居るとい
るこれいふこと但し後撰のちゆがはつるあつて
とらと書もあふはるうへび式ア云々もまうとこ
をまうくうことと書あり一もあつ居らんもまり
うう〜龜鏡集といふ文の伴舟の家山の入
道う撰といひあ入馬輪の甲虫歌こ
或人よてくこといふ小付く海く形とらふいふこ
被ともまあ写とこの書こ被入道伴舟海もるをこ

あゝ能知事あつえ

奥義被云あがのあが居くとく〜あがの
うこのさあはれなり〜さあはれのあゝんそ
のあうを〜あれ〜居るるり〜又そゆふ
さあ〜あはれ〜あはれの〜あまはれ〜あはれを
あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ
らそ〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ
い〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ
る衆う〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ

サイクダ
海文女海集云海く〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ

あがらさきゆりらうはるるるるるるるるるる
ねままてうららるるるるるるるるるるるるるる
まうらうららららららららららららららららら
あがたらうらららららららららららららららら
あえあやいせうららららららららららららら
ららららららららららららららららららららら

